

宮城山岳通信 第35号

目次

巻頭言	千石信夫支部長・・・・・・・・・・2頁
定例役員会報告(11月・12月・1月・2月・3月)	事務局・・・・・・・・・・2～9頁
宮城支部 山行報告	
☆大峯奥駈修行(最終回)弥山～前鬼	八尾 寛・・・・・・・・・・10～14頁
☆初冬山行(オボコンベ山)	加藤知宏・・・・・・・・・・14～15頁
☆厳冬期山行(宮城蔵王 刈田岳)	遠藤幸壽・・・・・・・・・・15～17頁
行事報告	
☆自然保護全国集会 2024	柴崎 徹・・・・・・・・・・17～18頁
☆令和6年度 宮城支部晚餐会	鳥山文蔵・・・・・・・・・・18頁
随筆・エッセー	
☆救助活動の回想	
私が携わった遭難救助活動(報告)〈第3回〉	高橋二義・・・・・・・・・・19～21頁
会員の皆様へ	事務局・・・・・・・・・・21頁
今後の行事予定	事務局・・・・・・・・・・21頁
編集後記	会報・編集出版委員長・・・・・・・・21頁

巻 頭 言

支部長 千石 信夫

今年の冬は、日本海側は大雪で大変な影響がありました。太平洋側は雪も少なく乾燥が続き山火事など発生し、異常な気象が続いております。災害に遭遇された地方の皆様には心よりお見舞い申し上げたいと思います。そのような暗いニュースの中でしたが、私は2月に久しぶりに蔵王で大変見ごたえのある樹氷が見られたことは、とても嬉しく印象に残る山行でした。

さて、いよいよ創立120周年の年となりました。全国で様々な記念事業が進められておりますが、宮城支部担当の古道調査は終了し、本部にて最終の編集確認作業などが進められているところだと思えます。

宮城支部では現在、役員会で新年度の事業計画を検討しておりますが、その中に前回の支部通信でも述べましたが、今年は日本山岳会創立120周年、そしてアルパタ初登頂100周年、来年はマナスル初登頂70周年と、軒並み節目の年となっております。この節目となる本年、本会の目的でもある「すべての人に山の楽しさを！」をスローガンに、広く仙台市民並びに県民に発信し、多くの登山者が集い、その偉業を称え、参加者と共に山の魅力を分かち合うことを目的に、榎有恒の思い出の山・故郷の山「泉ヶ岳」で、「榎有恒を偲ぶ泉ヶ岳登山」を開催することにいたしました。会員の皆様のご協力をお願いしたいと思います。

今年は役員改選の年に当たります。支部長職も任期満了となります。あつと言う間の4年間でした。思うようにできなかった反省はありますが、新しい会員が入会されたことはうれしく思っております。次年度からは新し

い体制で活気ある支部になるよう願って、微力ながら協力してまいりたいと思います。

【定例役員会報告】

■令和6年11月定例役員会

日 時：11月27日(水) 18:00～

場 所：仙台市生涯学習支援センター

出席者：千石、冨塚、柴崎、高橋、横山、草野、遠藤、八尾、加藤、鳥山 計10名

千石支部長より来年度は本会120周年を迎え、宮城支部は役員改選期となります。次年度の様々な事業計画を早く取りまとめていきたいと挨拶、議事に入った。

《報告事項》

イ) 総務・財務委員会

(1) 支部連絡会議(12月19日)について(冨塚)
「協議事項」で報告

(2) 令和6年度晩餐会の参加者について

(千石)：本部から4名を要請されたが、2名が出席予定。この晩餐会について会費と交通費等の負担に関し意見交換する。

(3) 令和6年度支部晩餐会&オークション(12月15日)について(冨塚)

現時点で10名の参加で少ない。当日出席の役員に要請、数名参加することになる。

(4) 東北・北海道地区支部主催・共催イベント情報の掲載依頼について：「協議事項」で報告

(5) 令和6年度第7回(11月度)理事会議事録について(冨塚)

(6) 宮城県山岳環境指導員の就任について

(冨塚)：宮城県環境生活部からの要請で6名(千石、冨塚、高橋、横山、千葉、太田)のうち太田氏が脱会したので八尾会員(了承)、また鈴田会員にも声掛けする。

ロ) 山行集会委員会

(1) 親子登山教室(10/19)の実施結果(千石)

親子登山教室のPRが難しかった(詳しくは「宮城山岳通信 34 号」参照)。

(2) 初冬山行(12/1)の実施計画(加藤)

特異な山容のオボコンベ山に日帰りで登る。現時点で参加者は9名。先日千石、加藤で偵察する予定であったが、天候悪く中止した。

ハ) 会報・編集出版委員会(鳥山)

「宮城山岳通信」第34号を11月8日に発行。次号の第35号は年明け3月中に発行、年4回発行の目標を目指す。来年の『宮城山岳』第29号の紀行・随筆への投稿を呼びかける。

二) 自然保護・科学委員会(柴崎)

○自然保護全国集会(11/3・4)参加結果

詳しくは後記「行事記録」参照

ホ) デジタル委員会(千石)

先日、デジタル化推進のズーム会議を開いた。12月にも開催する。

《審議事項》 特になし

《協議事項》

(1) 東北・北海道地区支部主催・共催イベント情報の掲載について(千石)

青森支部の中村氏からの提案は、本部のHPを活用し、東北・北海道地区支部が主催、共催するイベントを掲載しようという内容。宮城支部としては本部のHPに掲載することから、一般対象に参加を呼びかける山行、講習、行事などに絞って検討する。

八尾会員→HPを維持管理するのは？

千石：本部のHPを活用するので管理は本部

(2) 支部連絡会議への提案(富塚)

12月19日に開催される支部連絡会は関西支部が担当。会の運営等に関する質問、意見、要望並びに他の支部に聞きたい事が打診されたが、出席者からは出なかった。

《その他》

○毎日新聞(10月17日)に掲載された旧制

仙台第二中学校の蔵王遭難の記事について
柴崎：気象遭難だけではない別の要因があった。表面をなぞっている感じで、もっと深く切り込まなければならない、残念だ。

■令和6年12月定例役員会

日時：12月18日(水) 18:00～

場所：仙台市生涯学習支援センター

出席者：千石、千葉、富塚、柴崎、草野、横山、遠藤、加藤、八尾、鈴田則文、鳥山

計11名

冒頭、千石支部長より、今年最後の役員会となりました。翌年の諸議題について審議よろしく願いしますと挨拶があった。

《報告事項》

イ) 総務・財務委員会

(1) 令和6年度支部晩餐会&オークションについて(富塚)

参加者17名、オークションの落札金は4万1000円あったが、当日時間延長で請求額が増え、37,500円のプラスとなる(詳しくは「行事報告」参照)。

(2) 宮城県山岳環境指導員就任者の件(富塚)

更新時期となり、宮城支部からの次期指導員として前任の千石、富塚、千葉、高橋、横山(岳連代表兼務)が残留、新たに八尾、鈴田則文の2名が就任、計7名となる。

(3) 令和7年度移動総会資料の調整について →《協議事項》

(4) 12月19日支部連絡会議の資料(千石)

明日、Zoom会議が開催される。議題は①晩餐会、②支部連絡会議、③支部の公益事業、④経費削減策などについて。検討して欲しい要望や意見があれば、千石が富塚まで。

(5) 第38回全国支部懇談会について(千石)

来年10月26日(日)・27日(月)に関西支部

が主催、大阪ガーデンパレス会場に、関西支部設立 90 周年記念式典と合わせ開催される。

ロ) 山行集会委員会(加藤)

12 月 1 日に実施された初冬山行の報告(詳しくは「山行報告」参照)。

ハ) デジタル委員会(デジタル化W・G)(千石)

・メンバーは千石、富塚、加藤、鈴田則文、八尾、石川の 6 名

〈千石私案〉

・委員会の目的: ①宮城支部 要保存書類の保管、②情報の共有、③会員相互の連絡、④情報の発信

・進め方: ①本部が進めている Google ドライブ(保管庫)の利用を決める、②保管庫のフォルダ種類、③書類のデジタル化作業、④会員の Google アカウント登録を進める→情報の共有化、⑤Zoom での会議で進める。

(1) 第 1 回WG打合せ 11 月 6 日(水)

・千石私案を進めるにはWGメンバーが Google ドライブの使用方法を熟知する。

・本部のドライブ内に宮城支部のフォルダを作り、WGメンバーが自由に使えるようにする。その後、支部役員、会員に拡大する。

・保管庫を作成し保管書類などをデジタル化。
・試しに 50 周年記念誌を一冊丸ごとデジタル化する(担当: 八尾)。

・その他の情報発信などは今後検討。

(2) 第 2 回WG打合せ 12 月 11 日(水)

・富塚さんがWGメンバーから外れ相談役に。

・資料のアーカイブに関し、担当を決めて資料を集め保管作業に入る。

●宮城山岳通信・宮城山岳・・・八尾

●総会資料・・・石川

●会計書類・現金出納帳・収支報告(予算・決算)・本部報告資料・・・千石

●山行報告書及び画像・・・鈴田

・鈴田提案の「これからの行事一覧を本会の宮城支部のウェブサイトに掲載する」件について、担当の加藤委員と相談する。

・情報発信は加藤さんがウェブサイトと X を担当。今後は加藤さんに情報の集約を徹底。

・親子登山をはじめ公益事業山行における個人写真の掲載は、参加募集時及び登山開始前に参加者から了承を得ている。

・ウェブサイト更新の知らせは、支部メンバーにリアルタイムで届くようメールかLINEを利用。

・個人写真の掲載について: 今後は全ての支部行事の計画書に、ウェブサイトに掲載する旨を明記する。

・山行写真の保管庫として山岳会の Google フォトを利用してはどうか。

(3) 東北・北海道地区支部提案書について

青森支部からの提案“山岳会本部のウェブサイト、北海道と東北で開催する行事及び山行への参加募集案内のためのバナーを作る”は、来年から掲載する山行を検討したい。

二) 山岳古道調査特別委員会(富塚)

12 月 2 日(月)開催のプロジェクト Zoom 会議で、宮城支部担当(5 つの古道)は全て原稿提出済みとなったが、「蔵王古道」のトップページが掲載されていないと報告され、富塚委員長が本部と確認中。尚、本部の山岳古道調査PJが解散されるまで、宮城支部の山岳古道調査特別委員会は存続させる。

来年の山岳古道集中山行の第 2 弾は大分県の国東半島を会場にして 4 月 26 日(土)・27 日(日)の開催。千石支部長より今年 10 月「本部・宮城支部合同山行」に参加した東九州支部より参加要請があったと報告。

ホ) 槇有恒顕彰碑PT

○今後の取り組みについて(千石)

ミーティングが開かれていない状況。年明けに開催したい。千葉副支部長より来年7月に実施される「アルバータ初登頂 100 周年記念カナディアン・ロッキーの旅」に参加すると報告があった。

宮城県出身の名誉会員は楨氏のほかに平沢亀一郎さん、早川種三さんの3氏がいる。お三方をどう顕彰するか検討したい。

《協議事項》

○令和7年度移動総会について(富塚)

(1) 日程及び場所について

千石→来年度総会は支部長はじめ各役員の改選期にあたるので、日程含め今後詰めた。

(2) 令和7年度事業計画(総括表)素案の件

定例役員会、支部連絡会議、会報・機関誌の発行、本部行事、支部行事を盛り込んだ総括表をチェック。

柴崎→自然保護全国集会は来年、新潟開催だが、再来年、宮城が候補地に上がっている
千葉→日本登山医学会が来年6月7・8日と石巻専修大学で開催される。

千石→公募する登山教室のスケジュール

(3) 役員の改選について

柴崎→宮城支部の今後の活動方針や柱を出して話し合うべき。

《審議事項》と《その他》は特になし

■令和7年1月定例役員会

日 時：1月15日(水)

場 所：仙台市生涯学習支援センター

参加者：千石、千葉、富塚、柴崎、横山、草野、遠藤、八尾、鳥山 計9名

千石支部長より新年挨拶のあと議事に入る。

《報告事項》

イ) 総務・財務委員会

(1) 12月9日支部連絡会議の結果(富塚)

・晩餐会へ地方からの参加は、東京までの交通費が高く厳しい→交流という主旨から理解ある方々が中心となり継続していく。

・支部連絡会議→今後はグーグルドライブに格納し、閲覧できるようにする。

・支部の公益事業→各支部から問題点や悩み、さらに高齢化の中での活動などを話し合う。

・経費削減：「山」の隔月刊行とPDFファイル化。『山岳』は今回議論せず。

(2) 令和6年度報酬等支払明細書提出(富塚)

支部長よりレスキューの講師謝礼代は本部と連絡して実施しており問題ないと報告。

(3) 令和7年度事業計画作成について(富塚)

支部長より1月31日締切りで事後報告。

(4) 第15回登山教室指導者養成講習会(富塚)

昨年、松元さんが参加。若手に案内を転送。

(5) 令和6年度第8回(12月度)理事会議事録について(富塚)

(6) 公益事業アンケートのお願い

(7) 令和7年度支部予算書の提出(千石)

1月20日締切りで本部に提出すること了承。

(8) 2025年度特別事業補助金応募案内(富塚)

この10年、宮城支部は応募していない。補助の対象に安全登山講習会が含まれている。支部長から「登山教室」が該当するので申請するか検討したい話があった。

(9) 会報「山」の隔月化について(富塚)

令和7年度から隔月化の予算を組む。隔月化に反対する場合、理由を添えて1月末までに本部へ回答する。宮城支部は賛成。

(10) 支部会員等名簿の作成進捗状況(富塚)

名簿掲載について会員33名、準会員5名、支部友9名に意思確認のハガキを送った。返信が来た方は載せ、返信無しの場合は名簿に載せない。また承諾いただいた方のみ名簿を送る。尚、登山届の名簿は、これまで通り

必要なので載せる。

ロ) 山行集会委員会

○厳冬期山行(2/1)の実施計画(遠藤)

すみかわスノーパークより刈田岳をめざす。ワカン組と山スキー組に分かれるが、登りは離れないよう注意する。支部長より現時点で6名の申し込みと報告される。

ハ) デジタル委員会・デジタル化W・G

○デジタル化の進捗状況(千石、八尾)

具体的には進んでいないが、1月に会議する。アーカイブにも役立てていきたい。

二) 山岳古道調査特別委員会(冨塚)

○国東半島集中山行(4/26~27)について

1月下旬に届く会報「山」に募集チラシが入る。支部長から昨秋、蔵王の交流山行に参加した北九州支部より参加要請があり、何人かの参加表明をしたい。

ホ) 他委員会

○自然保護委員会(柴崎)

今年、新潟で開催される自然保護全国大会に向け、宮城支部で何を報告するか準備する。

ヘ) 榎有恒顕彰碑PT(千石、千葉)

まだプロジェクト会議が開催できていない。7月17日から24日まで開催されるアルバータ初登頂100周年記念の旅に千石夫妻、千葉、冨塚が参加予定で、草野会員は検討中。

《協議事項》

○令和7年度総会開催に向けてのスケジュールについて(千石)

日程は4月19日(土)とし、今回は役員選任の議題があり、移動総会ではなく市内で開催する。会場は仙台市生涯学習支援センターが取れるか申し込む。また、総会議案は3月の役員会に諮り了承を得る。

○宮城・山形支部交流会(千石)

今年は宮城支部が担当する。どこで開催す

るか場所のアイデアを出してほしい。

《審議事項》 特になし

■令和7年2月定例役員会

日 時：2月19日(水)

場 所：仙台市生涯学習支援センター

参加者：千石、千葉、柴崎、横山、草野、遠藤、八尾、鈴田(則)、鈴田(泰)、鳥山 10名

千石支部長より、総会に向け次年度の懸案事項を検討していただきたいと挨拶があった。

《報告事項》

イ) 総務・財務委員会

(1) 令和7年度事業計画(提出)の件 (千石)

本部へ提出の事業概要と事業計画素案について説明。

(2) 令和6年度第9回(1月度)理事会議事録

(3) 会報「山」の隔月化(続報)について(千石)

隔月発行案が本部理事会で毎月発行に決まった。会員より会報を楽しんでいる声が多数寄せられたとのこと。予算削減は会報のメール配信等で実践していく。

(4) 令和7年度支部予算書(提出)の件(千石)

収入計193,000円、支出計193,000円の予算書を本部へ提出。

(5) 支部会員等名簿の作成進捗状況(千石)

「宮城支部会員等名簿の取り扱いについて」を説明。2月中に名簿掲載の承認をいただいた会員等に送る段取りをしている。

ロ) 山行集会委員会

(1) 厳冬期山行の実施結果について(遠藤)

下記の「山行報告」参照

(2) 早春山行の実施計画について(遠藤)

3月29日(土)、南蔵王白石スキー場から不忘山(1705m)を目指す。リフトが3月16日で終了するので自力で登る。

ハ) デジタル委員会(デジタル化WG)

○デジタル化WG打合せ結果について(八尾)

1月29日にZoomで開催。千石、富塚、八尾、加藤、鈴田(則)、石川が参加。

- ① 宮城支部の「アーカイブ」フォルダに宮城山岳通信、宮城山岳、総会資料、事務資料(会計書類・現金出納帳・収支報告・本部報告資料)、山行報告書及び画像の5項目を作った。
- ② 山行写真は多数あるため、保管庫として山岳会のGoogleフォトフォルダ(無制限)を利用する。
- ③ 宮城支部のウェブサイトに最新情報をアップし充実をはかると同時に、情報発信のツールとしてウェブサイトを活用する。
- ④ 加藤委員がウェブサイトとXを担当するので山行担当者は計画と報告を、その都度加藤委員への連絡を徹底する。

二) 海外・高所登山・医療委員会

○第45回日本登山医学学会(千葉)

今年6月7、8日、石巻市で開催される。低体温症などの報告をはじめ、8日の日曜日には市民公開講座(無料)も開催。

ホ) 他委員会・・・特に報告なし

へ) 山岳古道調査特別委員会

○全国山岳古道会議事録について(千石)

2月3日にZoomで開催。古道データの提出状況はじめ調査不可能な古道と国東半島集中山行について話し合われた。

ト) 榎有恒顕彰碑PT

○榎有恒顕彰碑PT会合の結果(千石)

1月29日にZoomで開催。「榎有恒」顕彰記念事業の趣意書案を説明、第1回「榎有恒」顕彰記念登山を、マナスル登頂5月19日に因んで、その前後の日程を設定し今年の5月18日(日)に実施する案にまとめた。

八尾：AIで調べた資料を提出する。

柴崎：榎さんを本当に理解して動こうとしているのか、うわべだけの動きに見える。

千石：これからがスタートなので、勉強を重ねていく。これまで実現できなかった懸案事項なので先ず立ち上げたい。

柴崎：仙台二高に記念碑がある。それを見るべきだ。慶応山岳部の会報はじめ山岳会の「山岳」に寄稿した文を読むべき、手元にある。

千石：そうした資料を柴崎さんか鳥山さんにまとめていただきたい。

鳥山：調べた資料は、折角なので会報に随時掲載し会員へのアピールをはかったらどうか。尚、早川種三さんの子息・早川二郎(元仙台放送役員)さんは、去年亡くなっていたことがわかった。

千石：「顕彰記念登山」という名称でなく、今回は「アルバータ登山100周年記念登山」として実施したい。

千葉：“第1回”を付けなくてもいいのでは。

千石：地元の仙台二高山岳部OBやオーエンス泉ヶ岳自然ふれあい館に協力を依頼する。

《協議事項》

(1) 令和7年度総会開催に向けてのスケジュールについて(千石)

4月19日(土)に東口の生涯学習支援センターで総会を開催する。そのため4月16日(水)に予定した4月定例役員会は休止する。

(2) 榎有恒顕彰特別委員会の設置の件(千石)

ワーキンググループのメンバー千石、千葉、富塚、遠藤、加藤に、木皿会員を加えた6名で特別委員会を設置したい→了承

(3) 宮城支部会員等名簿配布時の添書(個人情報保護)について(千石)

《報告事項》の(5)参照

《審議事項》

○総会資料については3月の定例役員会に提

出する件→了承

《その他》

○総会終了後の懇親会について(千石)

実施すべく会場を探す

■令和7年3月定例役員会

日 時：3月19日(水)

場 所：仙台市生涯学習支援センター

参加者：千石、千葉、富塚、柴崎、高橋、横山、草野、八尾、鈴田(則)、鈴田(泰)、遠藤、鳥山 計12名

千石支部長より、今年度最後の役員会ですが、支部長任期最後の役員会です。総会を終え、新年度も皆さんと一緒に歩いて行きましようとの離任も兼ねた挨拶があった。

《報告事項》

イ) 総務・財務委員会

(1) 支部連絡会議について(富塚)

3月26日に開催される会議の議題を説明

(2) 橋本会長ヒアリングについて(千石)

3月7日、会長より支部状況についてヒアリングがあった。宮城支部から現状と新年度のイベントなどを報告。最後に会長から女性登用の要請があった。

(3) 第38回東北・北海道地区集会(富塚)

担当する北海道支部より案内メールが届いた。7月11日(金)・12日(土)開催。後に会員宛にメールする。

(4) 令和6年度第10回(2月度)理事会議事録(富塚)：2月13日(木)開催の報告

(5) 2024年12月、実施事業アンケートのまとめ(広島支部)について(富塚)

かなりのボリュームなので、後にメールで送付しますので見ていただきたい。

(6) 令和6年度会計監査結果について(横山)

役員会に先立ち、令和6年度収支決算書の

監査を会計監査担当の横山、草野が行い、代表して横山担当から適正であり承認しますと報告があった。

ロ) デジタル委員会(デジタル化WG)

○打合せ(2月26日)結果について(八尾)

Google サイトを利用して自前のHPを作成、既存の宮城支部HPと連携する案を検討。メリット、デメリットがあるが、Google サイト試作HPをベースに更に検討する。また編集マニュアルを作成しWGに周知する。千葉→Google サイトのHPは、パスワードとか必要になるのか？

八尾→原則は入らないが、確認する。

ここで議事になかった「柴崎徹さんの名誉会員申請」について高橋会員より説明があった。そのあと本部に申請する前に宮城支部として“支部名誉会員”を承認すべきとなり、千石支部長より推薦する旨を諮ると拍手多数で認められた。来月の総会に諮り、宮城支部の総意として東北ブロックの支部長はじめ本部評議員などに働き掛けていくことにした。

ハ) 海外・高所登山・医療委員会(千葉)

○第45回日本登山医学会学術集会について

6月7日(土)から8日(日)まで石巻専修大学で開催。登山についての医学及び運動生理学に関わる演題で講演が行われる。

二) 他委員会

○会報・編集出版委員会(鳥山)

「宮城山岳通信」第35号は今月末発行予定。

○自然保護・科学委員会：特になし

ホ) 槇有恒顕彰特別委員会(千石)

2月28日に会合した結果、5月18日(日)に『槇有恒』を偲ぶ泉ヶ岳登山を実施する。先日、オーエンス泉ヶ岳自然ふれあい館に挨

捌し偲ぶ登山に協力していただく。館内を見学すると談話室があり、写真掲載できるスペースなどがあった。橋本会長ヒアリングの際、榎有恒に関する写真などの協力を依頼した。柴崎→「木暮理太郎を偲ぶ会」が詳しい年表を作成している(原本持参)。そこで榎さんを偲ぶ登山を始めるにあたり、榎さんの年表を作るのが第一歩である(原本を八尾会員が預かり、後に特別委員に配布する)。

偲ぶ登山の後援として仙台市教育委員会から承認を得、宮城県山岳連盟にも提出し間もなく承認が得られる見込み。

《協議事項》

(1) 役員選任(案)について(富塚)

新役員＝(再任)八尾寛、千石信夫、千葉正道、富塚和衛、横山哲、草野洋一、柴崎徹、高橋二義、鳥山文蔵、遠藤幸壽、加藤知宏、鈴田則文、(新任)石川弘子、渡邊典男 14名(佐藤昭次郎、鳥田笑美、鈴田泰子は退任)

総会での承認事項となる。

(2) 支部長、副支部長、他新執行部の選任(案)について(富塚)

支部長 八尾寛(新) 会計 石川弘子(新)
副支部長 千石信夫(新) 会計監事 横山哲
副支部長 千葉正道 会計監査 草野洋一
事務局 富塚和衛

役員会の決議事項として諮られ、拍手多数で承認された。

(3) 各種委員会委員選任(案)について(富塚)

○総務・財務委員会

委員長：富塚和衛 委員：石川弘子(新)

○山行集会委員会

委員長：千石信夫

委員：草野洋一、加藤知宏、富塚和衛、遠藤幸壽、鈴田則文、八尾寛、渡邊典男(新)

○会報・編集出版委員会

委員長：鳥山文蔵 委員：富塚和衛

○海外・高所登山・医療委員会

委員長：千葉正道

委員：八尾寛、渡邊典男(新)

○自然保護・科学委員会

委員長：柴崎徹 委員：高橋二義

○指導・遭難対策委員会

委員長：高橋二義

遭難対策本部長担当：八尾寛(新)

委員：他役員全員

○女性懇談委員会

委員長： 委員：石川弘子(新)

○メディア委員会

委員長：加藤知宏

委員兼デジタル化WGメンバー：千石信夫、

八尾寛、鈴田則文、石川弘子、富塚和衛

役員会の承認事項として諮られ承認される。

《審議事項》

○総会資料：千石支部長と富塚事務局より提出する各議案の説明

《その他》

(1) 会員等の動向について(富塚)

宇都宮昭義、佐藤昭次郎両氏が退会した。準会員の佐藤翔太、石川弘子、渡邊典男、佐藤善武の4名が会員となる。

(2) 支部規約の見直しについて(富塚)

新年度の役員会で検討し、令和8年度の総会に諮りたい。

○八尾会員より、本部の「山行委員会」が解散し、新たに「山行クラブ」となったが、自身が関わって交流し、窓口になる。

【山 行 報 告】

大峯奥駈修行に参加して

(最終回) 弥山〜前鬼

報告者 八尾 寛

実施日 令和6年6月26日(水)〜30日(日)

コース 吉野〜熊野 おおみねおくかけみち 大峯奥駈道

参加者 富塚和衛、八尾 寛 以上2名

午前4時半、各自支度を整え弥山小屋の前に集合した。天気は少し回復し、霧雨になっている。山頂に雲がかかっているためなのだろう。赤テントを片づけている若者に声をかけた。「学生さんやね。どこの山岳部やろか?」、「関学です。昨日、天川川合から登り、今日は小篠宿でテント泊する予定です」。難所が待ち構えている奥駈道を重装備で行くのは、さぞかしきつかるう。「天気が良いとええね。気い付けて行きや」。一昨日、山上ヶ岳で合流した最高齢の行者は、ここで山を下りるという。「歩くのが遅うなってもた。迷惑かけたらあかんさかい」。前鬼の小仲坊まで13時間を見込んでいたので、順調にいても午後6時ごろになる。暗いうちに発てれば良かったのだが、山小屋としては4時前の朝食はお断りなのだろう。参籠所とはわけが違う。

弁財天が祀られている方角に一礼し、法螺貝の音とともに出発した。目指すは近畿地方の最高峰・八経ヶ岳(1915.2m)である。なだらかな尾根は豊かな苔に覆われ、トウヒやシラビソがまだらに生えている。登り返すと、まもなく鹿よけのゲートをくぐった。天然記念物オオヤマレンゲの群生地である。延々と続くフェンスに囲まれている。「木の皮がうまいので鹿が好むそうや」。枯木が目立つのは鹿の食害のためだろうか。花期はとうに過ぎた

のだろう、一輪も咲いていなかった。再びゲートをくぐり柵の外へ出た。しばらく登り5時30分、第51番 なびき 摩・八経ヶ岳の頂上で勤行。残念ながら霧に覆われ、まったく展望がきかない。



▲八経ヶ岳の なびき 摩に ひで 秘伝を奉納する住職

さて、ここから先は自分にとり未知の領域である。高揚した気分で山を下った。奥駈道は険しい岩場にさしかかり、明星ヶ岳を巻いていく。さらにトウヒ、シラビソ、苔に覆われた原始の森の中を延々と歩いていく。根こそぎ倒れた木がいくつもある。しかし、むき出しになった根にはコケやシダが張り付き、若木が芽を出している。何ヵ所かで勤行しながら深い森の中を進んでいった。8時10分、緩やかな尾根の中央に大きな窪みがあり、その中にバイケイソウなどの花が乱れ咲いている場所に出た。第46番 なびき 摩・ たわ 船の多和である。行者たちは窪みを取り囲み、勤行を行った。

さらに草を分けながら進み8時30分、第44番 なびき 摩・楊枝ノ宿に出た。広場の中央に土を盛った塚があり、先達の一人が線香を上げ、念入りに勤行した。「この場所には、志半ばで倒れた行者や強力たちの霊が集まるといわれている」と住職。私の祖父の霊も、ここに来ているのだろうか……。祖父の思い出が脳裏に浮かんだ。

私が祖父に連れられ、初めて大峰山に登った

のは中学1年生の時である。高校生の兄と従弟も一緒である。ちょうど祖父の32回目の大峰修行に当たり、3人の孫を連れて登る日を待ち焦がれていたのではないだろうか。われわれ奉龍講の一行は洞川の旅館に一泊し、洞辻茶屋を経て表行場、裏行場を回った。鐘掛岩で鎖にしがみついていると、上から先達が「右足を、そこの岩角にかけろんや」などと声をかける。平等岩では足運びの順序を誤り、ヒヤリとし先達の腕を掴む手に力が入った。しかし、その翌年、33回目の記念登拝を目前に、祖父は76歳で亡くなった。祖母の話では前日までは、いつもと変わらずに元気になっていたが、翌朝、隣の布団で冷たくなっていたという。一周忌の年、私は兄と大峰登山を計画した。洞川から登り、山上ヶ岳の参籠所で一泊し、柏木へ下るコースである。すると珍しく父も一緒に登るという。父は祖父の錫杖付き金剛杖と集印帳を携えた。大峯山寺で33回目の御朱印をもらい本堂の外へ出ると、金剛杖の錫杖部分が“チャリーン”と地面に落ちたのである。祖父の満行が叶ったのだろうか・・・。



▲祖父(左)と大峰修行へ向かう13歳の筆者

雨は、いつの間にか止んでいた。奥駈道はチシマザサに覆われた明るい落葉樹の森から、苔に覆われた針葉樹の森へと入った。見渡す限り、ふかふかの苔である。「ジブリの森みた

いやね」、「飛び込んでみたいね」と、若手の行者の話し声が聞こえた。行者一行の歩みが止まった。先頭に行く住職の声が聞こえる。「道を間違えたみたいや。尾根の東側へ出るはずや」。少し引き返すと、踏み跡程度の道が分かれている。「これや、これや」、辿っていくと“大峰奥駈道”と書かれた小さな道標が目に入った。道のほとんどは生い茂ったチシマザサに覆い隠されている。それでも途切れることもなく延々と続いている。これが奥駈道なのだ。遙か千年以上の昔から、先人が歩んできた道なのである。

尾根の東側は断崖絶壁である。12時、第42番^{なびき}摩・孔雀ノ硯に到着した。150^ふ以上落ち込んだ先の谷は前鬼川である。北山川に注ぎ、十津川と合流して熊野川となり太平洋へそそぐ。谷を挟んで台高山脈の山々が、どこまでも連なっている。その向こうに海があるのだろうか。谷を見下ろすと、いくつもの岩峰が立ち並んでいる。五百羅漢だ。両部分けの尾根を越える。吉野からここまでが金剛界、ここから熊野までが胎蔵界になるのだという。すると眼前に美しいピラミッド形の山が姿を現わした。「釈迦ヶ岳や、てっぺんのお釈迦様が見えるで」。目を凝らしてみたが、どこに釈迦像があるのかよくわからない。そうこうしているうちに、山頂は霧に隠れてしまった。



▲孔雀ノ硯から五百羅漢

前方に立ちのぼる巨大な岩壁を巻き、西側が大きく崩れ落ちた岩場を回り込むと、釈迦如来像が目に入った。14時20分、第40番^{なびき}摩・釈迦ヶ岳(1799.9m)に到着したのである。女性4人、男性1人の先客は、太尾登山口から入り大日岳を経てきたという。「今から勤行を行います。よろしければ、ご一緒にお祈り下さい」。達成感というよりは、むしろ無の境地である。「ここに来て良かった」。行者一行の誰も彼もが笑顔、笑顔である。釈迦如来像は創建大正13年というから、今からちょうど100年前である。「鬼マサ」の異名で知られていた^{ごうりき}強力の岡田雅行氏とその妻が、3分割して担ぎ上げたと伝えられる。山頂の人工物など余計だと考えていたが、3日間の長旅を経て辿り着いてみると、実にありがたみがあるものだ。



▲釈迦ヶ岳頂上の行者一行
(C バンリ写真事務所)

前方に大日岳の岩峰を眺めながら、標高差約300^{メートル}をぐんぐん下り15時45分、第38番^{なびき}摩・^{じんせん}深仙ノ宿に着いた。お堂から少し東に入った所に^{こうしょうすい}香精水が岩壁から湧き出ている。一口含み、^{のど}渇いた喉を潤した。

さて、ここに来て疲労困憊した行者が2名いた。一人は登山靴のソールが大きく剥がれてしまったらしい。他の一人はザックがやたら重たい。「荷を分けて、軽くしたらええ」と、

先達の一人がザックの中身を改めると、次から次へとボトルが出てきた。合わせて3.5リットルぐらいはあるだろうか。「水を捨てて軽くしたらどうや?」、「いやや!」と、ボトルを取り戻そうとする。この人は糖尿病を患っているのである。喉の渇きが耐え難いのであろう。水をガブ飲みしては小便に出すを繰り返しながら、ここまで来たのである。前鬼まで標高差700^{メートル}の下りに約3時間要する。暗くなると危険だということで、この2名と経験豊かな先達3名を後に残し、われわれは先に進んだ。

大日岳を巻き、しばらく下ると“これより南奥駈道”と書かれた大きな道標が目に入った。16時20分、太古ノ辻に到着したのである。“本宮備崎まで45キロ24時間”と表示されているように、細い先人の道が先へ先へと手招きしている。われわれ行者一行は道標を後にし、暗い谷へと降りて行った。「ここからは階段が続きます。全部で853段あると云われています。滑りやすいので気を付けてください」と法雲さん。階段はまだしも、ところどころで登山道が崩落しているではないか。17時30分、第33番^{なびき}摩・二つ石に到着。その名の通り、それぞれ^{しんぎゃく}矜羯羅童子(こんがらどうじ)、^{せいいたか}制多迦童子(せいたかどうじ)と呼ばれる奇妙な形の巨岩が、二つ並んで聳え立っている。かつては、この岩の^{ふち}縁を「8」の字形に回る行があったという。この場所から大峰主稜が彼方に見え、その下に五百羅漢の奇岩が立ち並んでいた。すると上から修行僧が二人やってきた。うち一人は美しい尼さんである。「ようお参り」、「ようお参り」と挨拶を交わし、先に降りて行った。前鬼の小仲坊に泊まるのだろうか・・・。

下りが延々と続き、辺りがだんだん暗くな



▲黄昏に前鬼宿坊へ向かって下る

ってきた。苔むした階段で滑り、尻もちをついた。幸い怪我はしていないようだ。沢を徒渉すると、左手に石を高く積み上げた建物跡が見えた。「以前は5件の宿坊が立ち並んでいたけど、今は小仲坊一軒だけになりました」と住職、^{えんのおづの えんのぎょうじゃ}役小角(役行者)が奥駈修行道を開いたのは、飛鳥時代の頃と伝えられている。この時、前鬼と後鬼の夫婦が助けたという。各所の役行者像の両脇には、斧を持った前鬼像と水瓶を携えた後鬼像が並んでいる。役行者の命を受け前鬼後鬼の夫婦が、この地に住まいし、代々、修行者の世話をしてきたそうだ。小仲坊の現当主・五鬼助義之さんは、この夫婦から61代目の子孫である。

ようやく小仲坊の屋根が見えたのは、午後7時少し前である。ご当主ら宿坊の皆さんが出迎えてくれた。まずは本堂前に並び、勤行(第29番^{なびき}摩)。この3日間の修行を無事に終えた喜びとともに、感謝の念が自然と湧き上がる。「冷やしたスイカを持ってきましたので、召し上がって下さい」と、後から声をかける人がいる。櫻本坊から住職を迎えに来た藤井さんである。見れば、うまそうなスイカの切り身がズラリと台の上に並んでいる。がぶりと一口。生き返る心地がする。

久々の風呂につかり夕食を済ませた頃、先ず二人の行者が宿坊に辿り着いた。残りの3

人は、まだ降りてこない。もう辺りは真っ暗である。やがて、かすかに法螺貝の音が聞こえた。こちらからも法螺貝を吹くと、“ブオー”と暗い谷間にこだました。合図が届いただろうか。しばらくして、また法螺貝の音が聞こえた。今度はハッキリと聞こえる。最後のグループが降りてきたのだ。合図を送る。法螺貝の音がだんだん大きくなる。チラチラと林間にライトがきらめく。こちらからもライトを振る。しばらくするとライトが谷間を下ってくるのが見えた。“まだか、まだか”と待っていると、ようやく3人の行者が姿を現わした。「ご苦労様でした」、割れるような拍手が彼らを迎えた。藤井さんがスイカを差し出した。真っ暗な谷間の危険な道を、ライトだけを頼りに降りてくるのは、さぞかし難儀だったことだろう。

翌朝、われわれ行者の一行は小仲坊を後にした。前鬼口まで下ると、櫻本坊がチャーターしたバスが待っていた。案内してくれたガイドの男性は、90歳になるという。バスは国道196号線をひた走り、北山川をさかのぼった。長い新伯母峯トンネルをくぐると、今度は吉野川に沿って下った。そして柏木、大滝など懐かしい集落を経て、上市で吉野川を渡り吉野山に入った。櫻本坊に到着したのは昼前である。本堂の^{えんのぎょうじゃ}役行者像の前に集合し、護摩を焚いて満行法要が行われた。そして行者各々に遂行証が授与された。三度目の満行をかなえ、先達に認定された行者もいた。

入浴を済ませると、素敵な精進料理が待っていた。^{たつみ}巽伯舟さん創作の「イタリアの風」である。先ずはノンアルビールで乾杯し、食前の^げ偈を唱えた。「一滴の水も天地の恵み 一粒の米も労苦の賜物 濃淡多少は問う所に非ず 謹んで食の功德を念ぜん」、「いただきま

す」。



▲創作料理「イタリアの風」

おわりに

今回の大峰奥駈修行は、人生をなぞるような山旅だった。吉野から山上ヶ岳への第1日は、幼・少年期に例えられよう。高度を上げるにつれ難易度が上がる。大峯山寺を目指し、様々な試練が課されるのである。そして大人の仲間入りが許される。山上ヶ岳から弥山への第2日は、青・壮年期である。山あり、谷あり難所を越えて、ひとかどの者になる。弥山から前鬼への第3日は、老年期である。決して楽ではない旅を経て、釈迦ヶ岳で人生の集大成を迎える。そして、太古ノ辻から死出の旅が始まる。行者が身に着ける白行衣は、死装束であるといわれる。大峰修行は、一度死んで、生まれ変わる儀式なのである。

果てしなきジブリの森に飛び込みて

苔のしとねに寝(い)なましものを
亡き人に会はんと思ふ山の塚

幼き吾れの初めての行
ここよりは下りあるのみ釈迦迎へ

長き道のり居並ぶ笑顔
死人(しにびと)も甦^{よみがえ}らんや

みずみずし^{すいか}西瓜一切れ口に入れなば
行満ちて精進料理あでやかに

もてなすひとの心ゆかしき

(完)

共益事業山行

初 冬 山 行

報告者 加藤 知宏

実施日 令和6年12月1日(日)

山 域 オボコンベ山(川崎町 595m)

コース 登山口～尾根取付～尾根～オボコンベ山～作業道跡出合～林道～登山口

参加者 会員＝加藤知宏(C L)、千石信夫、
草野洋一、富塚和衛、八尾寛 準会員＝石
川弘子、佐藤善武

支部友＝鳥田伊志、能勢真人 計9名

2024年の初冬山行は、この時期らしい寒さの下、9名の会員等に参加いただき実施した。

当日は、午前9時に本砂金川沿いの登山口に集合し、山行を開始した。序盤は本砂金川



▲本砂金川を徒渉し上流に向かう

の渡渉から始まり、上流に向かって50分ほど歩みを進めていく。午前10時頃に尾根取付に



▲尾根取付き地点

到着。ここからハードな急坂を 30 分ほど登っていく。時々休憩をはさみながら、何とか尾根に到着する。

当初の計画では、桐ノ目山に向かう予定だったが、桐ノ目山への分岐を通り過ぎてしまったため、支部長等と相談の上、オボコンベ山頂に向かうこととした。オボコンベ山頂手前のマンモス岩は、回り込みして正面から見ると、その名の通りマンモスに見え、長く伸びているのが鼻のようである。



▲オボコンベ山頂で集合記念写真

午前 10 時 55 分にオボコンベ山頂に到着。山頂からは手前に桐ノ目山、奥に雪化粧をした大東岳など 360 度の眺望が広がっていた。幸運にも風が吹いていなかったためメンバー全員で記念写真を撮り、昼食をとる。

午前 11 時 30 分に下山を開始した。登ってきた反対側に降りて行くが、こちらは凄い急斜面！ 鎖やロープのある痩せ尾根を慎重に



▲ロープを握り、足場に注意しながらの下降

下っていく。なかなかスリリングで、この山行一番の緊張を強いられた。そのあとは藪漕ぎをしつつ、林道跡を下っていく。やがて本砂金川近くの平坦な十字路に出て、ここを大きく左折して、本砂金川を渡渉し登山口に向かう。登山口には、午後 0 時 50 分に到着し、解散した。メンバー皆、元気な様子だった。

オボコンベ山はヤブ蚊や山ヒルが多く、夏の藪漕ぎも大変なので、初春や紅葉から初冬の時期の山行が適当だと感じた。また、仙台から近く、標高 595 メートルながら、沢歩きや急登などのバラエティ溢れる登山が楽しめるので、また登ってみたいと思える山だった。今回、参加いただいた皆様、ありがとうございました。

共益事業山行

厳 冬 期 山 行

報告者 遠藤 幸壽

実施日 令和 7 年 2 月 1 日(土)

山 域 宮城蔵王 刈田岳(1757.8m)

コース すみかわスノーパーク駐車場～第 1 リフト～第 2 リフト～第 3 リフト終点～刈田岳～同ルート下山～スキー場～すみかわスノーパーク駐車場

参加者 会員＝遠藤幸壽(C L)、千石信夫(S L)、千葉正道、松元秀平、八尾寛、石川弘子、支部友＝能勢真人、ゲスト＝佐藤俊幸
計 8 名

当日は曇天、一時強風の中、朝 8 時 30 分宮城蔵王スキー場の澄川ゲレンデのレストハウスに 8 名が集合しました(佐藤氏はメンバーを送って来て、すぐに帰る)。9 時のリフト乗車で登山開始。リフト 3 本を乗り継いで 9 時 30 分、終点の後見ゲレンデ上部に着く。スキ



▲すみかわレストハウス前にて



▲後見ゲレンデ上部にて。左より松元、石川、八尾、千石、遠藤、千葉の面々

一客が数名おり、風は弱く曇天ながら“登山日和か”と思われた。我々の雪山装備は輪カンジキ 3 名、スノーシュー 2 名、山スキー 2 名とまちまちでした。

午前 10 時いよいよ出発しようとしたのですが、スノーシューでも膝上の深雪ラッセルを強いられました。やむなく雪上車の踏み跡(宮



▲エコーラインを行く。左より遠藤、松元、八尾、千葉、千石、石川

城県観光道路と蔵王エコーライン)を行くこととなりました。エコーライン合流地点(大黒天)に 11 時着。正面にうっすらと巨大な五色岳と左手に刈田岳が現われ、振り向くと杉ヶ峰と後烏帽子岳が綺麗に見渡され、至極のひとときでした。



▲樹氷原眺望。背景に後烏帽子岳から屏風岳

ここから登山道は濁川沿いの杭棒を頼りに登り始めましたが、トップのスキークループが躊躇するほど雪は深く、吹雪始めた視界の悪さに、なかなかスピードが上がりません。やむなくエコーラインに出て、雪上車の粉塵を仰ぐこととなりました。

程なくメンバーのスノーシューが壊れ、それをストックした後は、すっぽで登ることになりました。すっぽで歩けるほどに硬い路面は、雪上車が 5~6 台列をなして付けてくれました(雪上車のドライバーも乗客もフレンドリーに手を振ってくれました)。

12 時 30 分、樹氷原に出たころ、立ったままのランチタイム。眼下には青麻山や遠刈田温泉が眺められました。井戸沢の源頭近くなるにつれて風が強く、気温は見る見る下がってきました。トップを行く私の赤布の竹竿が“ビュービュー”と鳴りはじめ、時おり暴風体勢をとるようになりました。悪天候の兆しです。樹氷(モンスター)を写真に納めたスキークループは、ここから(刈田峠の手前 500



▲井戸沢横断地点手前のモンスター前

左より千葉、遠藤、八尾、千石、松元、石川(ト)帰ることになりました(2名のスキークループは14時30分、無事下山し帰宅しました：入山ノート記載で確認)。

登頂を目指す5名のグループは、坊平スキー場からの強風にあおられながら、13時15分ハイラインの入りロゲート小屋に辿り着いた。小屋の風下に雪を削って長椅子を作り、大休止となりました。休んでいる間にも風雪は益々強くなり、ホワイトアウトの様相に。刈田岳(山頂神社)まであと2^{キロ}、2時間ほどかかる見込みから、協議の上、登頂を断念して下ることに決めました。

13時30分に下山を開始し、広大なシラビソの樹氷原の元聖山ゲレンデを眺めながら、15時45分無事レストハウスに下山することが出来ました。16時、早めの現地解散となりました。

令和7年度宮城支部総会のご案内

下記と通り開催しますので、会員皆様ご出席下さいますようご案内申し上げます。

記

○日時 令和7年4月19日(土)

午後5時より

○会場 仙台市生涯学習支援センター5F
セミナー室 事務局

【行 事 報 告】

■自然保護全国集会 2024 に参加して

自然保護委員長 柴崎 徹

コロナ禍で中断していた自然保護全国集会が復活した昨年の高尾山につづいて、本年は11月3、4日、会場を都心に移し、新宿カンファレンスセンターで基調講演、支部報告、本部報告が行われ、翌日には「都市に暮らす人々が求める自然とは——新宿御苑に学ぶ——」をテーマに、フィールド・スタディが行われた。

基調講演は竹内望さん(千葉大学理学部地球科学科教授)による「雪と氷にすむ不思議な生きものたち：雪氷生物の世界」と題した、雪渓や氷河に生きる生物たちの話で、これは大変面白かった。夏季、雪渓を歩いていると、雪上を歩行するカワゲラやユスリカなど何種類かの虫に出会うのは誰でも経験することだが、その行動を追い、行く先を辿っていくと、雪や氷の間の空間に生息する赤色や緑色を呈した藻類やカビなどの微生物を求めて、それを食物にしていることが解ったという。そして、ここには一つの生態系が存在しているという。面白いことに、これらの微生物は地球上に最初に登場したシアノバクテリアに近い生物の性質をもつらしい。そう言えば雪渓のところどころに、赤い色や変な色に染まった部分があって、不思議に思って眺めていたが、講演を聴いてその謎がひとつ解けたように思った。

そして、東北の月山は広大な雪渓が遅くまで残る山だが、そのために雪氷生物の宝庫で、しかもここでしか見られない特異な雪氷生物も認められるという。スライドと動画をまじえた講演は飽くことがなかった。

支部報告は15支部からあった。どの支部も、それぞれ支部独自の課題をもって自然保護に取り組んでおり、しっかりと成果を挙げている支部もあれば、悪戦苦闘のさなかにある支部も少なくない。自然保護は日本山岳会の活動の重要な柱の一つに位置づけられているが、どの課題をとってみても時間と労力と根気を要する課題ばかりであるといえよう。宮城支部からは「東日本大震災以降の宮城支部の自然保護活動」と題して、15分ほど報告させていただいた。

本部報告は下野綾子さん(自然保護委員会委員長)によって、自然や山岳において起っている変化を科学的方法を駆使して、質的量的に正確に捉え、生物多様性を損なうことから反転していく“ネイチャーポジティブ発展社会構想”に、日本山岳会も参画していることの意義を話されました。

恒例の懇親会は都庁近くの居酒屋で、ほぼ全員が参加して行われました。狭い場所に鮎詰め状態の席だったが、お陰で隣に座られた若い自然保護委員の方たちと直ぐに会話が弾んで交流を深めることができた。宮城支部から差し入れた地酒は、とりわけ好評だった。

■令和6年度 宮城支部晩餐会

期 日 令和6年12月15日(日)

会 場 ホテル白萩(青葉区錦町)

師走の日曜日夜、宮城支部恒例の晩餐会が錦町にあるホテル白萩で開催された。千石信夫支部長の挨拶のあと、早速乾杯して晩餐会が始まった。出席会員、支部友の皆様から近況スピーチがあり、最長老の柴崎徹会員が「今年は例年になくたくさんの山に登った。お陰で1500座に登り、2年後に1600座をめざしたい」と抱負を語ると、会場から万雷の拍手が



▲開会の挨拶をする千石信夫支部長

あった。

この後、今年の山行報告として八尾寛会員が「大峰奥駆修行(櫻本坊)」について、準会員の佐藤善武さんが夏山山行の「槍ヶ岳縦走」について、最後は準会員の渡邊典男さんが仙台三高山の会を主体とするメンバーで挑んだ「ベディンゴ(6125m)遠征」について、それぞれ映像を映しながら報告した。

最後は恒例のオークションとなり、例年になく豪華で多数の出品があり、参加者の協力で売上金は41,000円となる。千葉正道副支部長の締めの挨拶で閉会したが、かなり時間をオーバーする熱気溢れる晩餐会となった。

[参加者] 千石信夫、柴崎徹、冨塚和衛、細川光一、千葉正道、横山哲、遠藤幸壽、八尾寛、鳥田笑美、鳥田伊志、加藤知宏、鈴田則文、鈴田泰子、渡邊典男、石川弘子、佐藤善武、鳥山文蔵 計17名

(報告者 鳥山文蔵)

『宮城山岳』第29号の原稿募集

会員皆様の投稿による「紀行・随筆」の原稿を募集しております。

○文字数：1500字程度(横書き)

○締切り：4月20日

○送付先：yrdbf275@yahoo.co.jp

会報・編集出版委員会 鳥山文蔵

【随筆・エッセー】

救助活動の回想

～人は誰でも 自分は大丈夫と

思いがちである～

高橋 二義

私が携わった遭難救助活動(報告)〈第3回〉

4 別ルートに登り転落、

意識不明者を吊り上げ救助搬送

(昭和51年6月20・21日)

この事故は若さ故に、別ルートでも登れるのではないかと時間待ちにシビレを切らして行動した結果、行き詰まってどうにもなくなり、手が疲れ転落したしたものと思っています。

20日の夕方に山想会事務局員から連絡がきて、急いで鳴子警察署に現況の確認と今後の行動について協議の為に立ち寄りました。警察署の責任者は鬼首に入っているとのことで、直ぐ鬼首に向かいました。警察との話し合いで、地元救助隊は現地に行けないとの事で、我々で下ろしてきますので今から入りますとお話すると、警察は夜になるので明朝入って欲しい、今晚入るのは許可しないとの事です。基本的には警察の指揮下に入っている行動と決めていたので仕方なく、そこで沢の入り口で泊まり、明日あかくなったら直ちに沢に入りますとの行動予定を何とか承諾いただき、21日の4時半頃に行動を開始しました。現地で一晚過ごした事故者は、容体も落ち着いて昏睡状態であるとの情報なので搬送の方法が問題でした。

そして、皆の反対を押し切って、スノーボートを沢の中の現場まで苦労して引揚げました。結果これが大変有効でした。当時、別の

会の仲間に東北大学医学部の友人が居り、現場に駆けつけてくれました。彼の判断は「このまま搬送したらヤバイよ」という事でした。この忠告を重く受け止めて、当時県警にヘリが導入されて何年も経っていなかったのですが、ヘリでの救助を強く強く何度もお願いしました。当初は“出来ない”との一点張りでしたが、下から病院まで運ぼうと言う事になり、ヘリが偵察を兼ねて上空に来ました。この時のパイロットが、自衛隊からスカウトされたヘリの教官だったのが幸いしました。且つ天気も味方して風もなく、空は快晴に近い状態であったことも幸いでした。現場を見てパイロットがやってみるかとなり、本部でも止む無くOKを出して戴き、日本で初めて意識不明者の吊り上げ搬送救助が決まりました。

この当時は増水で中州にとり残された人をピックアップ(吊り上げ)した経験はもっていましたが、意識不明の人間を何百メートルも宙吊り空輸した事例は全国でも全く無いということでした。

我々もスノーボートをどのようにセットしたらよいのかについて考え、先ず底がついていない状態に耐えられるように、真っ直ぐな立ち木を切って底部分の補強をしました。そして事故者の呼吸がジャイロの風圧で止まる事の無いように、顔の上40センチくらいのところに小さなテントを設置しました。ボート全体の底をロープで覆うようにネットを作り、吊り上げポイントまで3点からロープを繰り出し、頭と足方向に約10度くらいの勾配を設けてセット完了でした。何度か吊り上げて角度やバランスを確認しました。

また、吊り上げ場所はパイロットの指示で滝から約50メートルほど下流側に移動し、ヘリを待ちました。このとき一番心配だったの

は吊り上げた後、ボートが回転しないかという事でした。下で待機していたパイロットに準備完了を連絡し、皆に少し離れた場所での待機を指示しました。ヘリが上空でホバリングし、ピックアップワイヤーを静かに降ろした。慎重にフックをかけてOKの合図をした。吊り上げた瞬間、一時ヘリが滝側にグラツときた時はハッとしましたが、直ぐに立て直し吊り上げは成功し、心配したボートの回転も起きないで静かに下の草原まで運ばれていきました。そこで家族と会い、ヘリの中に収容され、国立仙台病院に運ばれて行きました。しかし、彼は翌日、家族に看取られ永遠の眠りにつきました。

後日、ご家族から“息のあるうちに会わせていただきまして有り難うございました”と挨拶を受けました。多くの仲間の協力で、日本で初めての無意識者の吊り上げ空輸救助が成功したことに、大きな安堵の気持ちを感じていましたが、同時に何をどう感じていたのか、当時一人娘で3歳の娘さんなのか？大変不憫に感じました。

5 氷河クレバスに落下、無事救助

(昭和55年5月2日)

これは初めての海外遠征中に発生した事故でした。私が隊長でしたので、本当に肝をつぶした危機一髪という事例です。

いろいろありましたが、何とか氷河の上に飛行機が下りて全員が揃い、装備・荷物もすべて揃いました。しかし、当初の計画では余り慎重に検討していなかった第3のランディングポイントでした。氷河の状態は幸いにもあまり悪くは無かったのですが、所々にクレバスがあり、絶対落ちないようにと6人全員で確認し合いました。

この日、5月2日は荷揚げ作業が始まってから3日目でありました。昨晚から細かい雪が降り、拓いたルートが積雪で全て隠れてしまったのです。ベースキャンプとC1間の朝の定時交信時で、荷物の仮集積場所までの移動は、きちんとロープで連結してくるように指示を出しました。スキー行動なのでその点が心配でしたが、彼ら二人はそのことをきちんと守ってスタックアウト(各自交互行動)で来たのが、結果的に救助につながったと今でも考えております。

10時に荷物の場所に下からと上からと集まって荷揚げを予定していたのですが、時間になって集合場所に着いてみると、二人が来ていなかったのです。上をよく見ると、遙か彼方で一人が手を振っているのが確認できました。しかし、もう一人が見つからないので、何かトラブルがあったと感じてそのまま現地へ急ぎました。

声が聞こえるようになると、「落ちたー」と言うことでした。一時、頭の中が真っ白になりました。直ぐに「怪我は？」と尋ねると、意外と落ち着いて「無傷で居ります、クレバスの中で待機しています」とのこと。浅いのかと思いましたが、ラッキーな事にクレバスの中に氷の棚があって、そこで救助を待っているとのことでした。落ちた時には確保していたK君も十数メートル引きずられ、ピッケルが氷の段差部分で停止に成功。落ちたS君は一時宙吊りになったがK君が荷重をアイスハーケンに移してクレバスを覗き込んでS君と対話し、数メートル下に足場になる氷の棚があるので、そこまで降ろしてくれとなり数メートル降ろして待機していたのでした。

我々が到着し、引き上げの手順は先ず履いているスキーを引き上げ、アイゼンに履き替

えてもらうことにした(常にアイゼンは活用できるようにしておくと決めていたが、二人は持参さえしていなかった)。先ずSから片方のスキーを外して引き上げ、私のアイゼンの片方を降ろして装着し、もう片方も同じようにして取換え、いよいよ引き上げに入る。人ひとり十数メートルを引き上げるのは楽では無かったが、無事引き上げ救助に成功した。S君は感激のあまり友の足元で大粒の涙をこぼして泣き出した。

この日は行動を中断してベースキャンプに戻り休養としました。尚、本人はこの後、二日間の休養で立ち直って戦列に復帰し、6名中3名の登頂を果たし無事帰国しました。

(つづく)

会 員 の 皆 様 へ

宮城支部の会員名簿は、『日本山岳会宮城支部個人情報保護管理規定』第5条の(6)の規定に基づき作成の作業をしてきました。

この度、「公益社団法人日本山岳会宮城支部会員・準会員・支部友会員名簿」として出来上がり、名簿掲載承認者のうち希望する会員のみに3月配布されました。

ご案内の通り、この名簿は個人情報に係るもので、宮城支部が『個人情報保護法』に定める個人情報取扱い事業者となります。従って個人情報の取扱いルール(管理規定)の定めに基づき、適正に管理する必要があります。

つきましては、名簿の取扱いについては、下記の点にご留意いただきますようよろしくお願い申し上げます。

- ① 個人情報取扱い者(配布会員等)は、名簿の複写は行わないこと。
- ② 名簿は紛失や盗難が無いよう厳重に管理すること。
- ③ 第三者には提供しないこと。

- ④ 管理規定に定める利用目的以外には利用しないこと。
- ⑤ 退会等により名簿が不要となった時は、責任をもって廃棄処分または個人情報管理者(支部長が指定する事務局長)に返却すること。
- ⑥ 遭難事故時など命に関わる時は、上記に係らず情報提供できる。

尚、今般の名簿は、会員等相互の親睦や有事の際の安否確認などの観点および支部活動の円滑な運営に資する事を目的に作成したものであることを申し添えます。 事務局

【今後の行事予定】

☆4月19日(土) 令和7年度宮城支部総会

☆5月11日(日) 春山山行 場所未定

☆5月14日(水) 5月定例役員会

仙台市生涯学習支援センター

☆5月18日(日) 「楨有恒」を偲ぶ泉ヶ岳登山

☆6月7日(土)～8(日) 第45回日本登山医学会学術集会 於石巻専修大学

☆6月18日(水) 6月定例役員会(同会場)

☆6月22日(日) 露払い山行 場所未定

日程、場所が諸事情で変更する場合があります。尚、メールで詳しく連絡します。

事務局

【編集後記】

3月に起きた大船渡の山林火災ニュースの映像を見せつけられると、火の恐ろしさを思い知らされました。嘗ては夏山で炊事する際は焚き火で作ったりしましたが、今は手軽なバーナーやコンロがあり、木の枝を集めて火を焚く必要はなくなりました。山登りを愉しむとする私たちは、山に入ったら“火の用心”を心がけたいものです。

会報・編集出版委員長 鳥山文蔵

宮城山岳通信 第 35 号

発 行 公益財団法人 日本山岳会宮城支部

発行日 2025 年 3 月 27 日

発行人 千石 信夫

会報・編集出版委員 鳥山文蔵、千石信夫、冨塚和衛、三宅 泰

事務局 〒983-0821 仙台市宮城野区岩切字畑中 9-12 (冨塚宅)

連絡先 TEL 090-2790-3771